市民の良識、未来を左右　科学史家・村上陽一郎氏

コロナと世界（3）

村上陽一郎氏（科学哲学者）

――新型コロナはスペイン風邪やペストなど歴史的な感染症に匹敵するとの見方もあります。

「人によっては生死にかかわるのに軽症や無症状の人もたくさんいる。宿主となった感染者がすぐに死んでしまうとウイルスは広がれないが、歩き回れる宿主も多い新型コロナは拡散しやすい。その点では戦略的に『賢いウイルス』といえる」

「人の行動範囲はかつてと比べて格段に広がったので、ウイルスの広がるスピードが上がり、感染の連鎖を断ち切るのが難しい。治療法やワクチンがない現状では、他人との接触を強制的に断つしかない。医療のキャパシティーを上回ると、重症度に応じた感染者の隔離も必要だ。人がとれる対策は中世や近世とさほど変わらない」

「都市封鎖の手法も古くから使われてきた。14 世紀にペストが流行した欧州では、警察や軍隊が出動して隔離し、社会をコントロールした。それでも約 3000 万人が死んだと推計されている」

――今日も感染症対策のため、やむをえず国民の自由を制約する動きが世界中で出ています。

「中国のように強権的な政権や独裁政治のほうが果断な措置を取りやすいのは確かだ。一方の日本では首相が緊急事態宣言を出すのにも時間がかかった。危機を前にして人権を尊重する社会は脆弱ともいえるが、国家主義や全体主義の台頭は許してはいけない」

「感染症対策という視点でみれば、対策が遅くなるほど感染者は増える。民主主義、自由主義の国家は国民ひとりひとりが自ら良識を備え、合理的に判断して行動するのを理想としている。しかし、いくら情報化が進んで対策を周知しても、すべての人間に実行を徹底させるのは難しい。その綻びが、感染症を防ぐ上では障害となる」

――科学に携わる者の役割は何でしょう。

「人は危機的な状況に陥ると不確かな情報に飛びつきやすい。不安や怒りに駆られ、ものごとを即断してしまいがちだ。科学者には、社会の普通の人々が普通の感覚で抱く疑問に対し、分かりやすく丁寧に説明する姿勢が求められる」

「感染症対策を唱える専門家への不信、デマの流布がみられる。私が研究した中世の欧州ペスト流行時にも、病人と視線を合わせると感染するといったデマが横行した。ネット上には真偽の不確かな情報があふれており専門家と人々をつなぐ科学ジャーナリズムや科学コミュニケーターの役割がより重要になる」

――情報を受け取る個人に必要な心得はありますか。

「一部の権威ある人々がすべてを決定した時代と異なり、今は社会にとって何が合理的なのかを最終的に判断するのは市民だ。個人の良識や常識、健全な思考に私たちの未来はかかっていると再認識すべきだ」

「日本の場合、近代の科学技術が導入された明治期から、実践的に役立つ『技術』を重視する傾向が強かったが、今こそ『科学』的な思想と態度を身に付けるときだ。自然の謎や『分からないこと』と真摯に向き合い、問い続ける。その継続によって良識は養われる」

（聞き手は山川公生）

◇

むらかみ・よういちろう　1936 年東京生まれ。62 年東大教養卒。科学史、科学思想史が専門。東大・国際基督教大名誉教授。著書に「ペスト大流行」「安全学」など。